中戦争の起源をめぐる 研究者の対話の試み

石島 紀之

西洋列強の挑戦への対処、近代化の道筋、近代ナショナリズ 要な原因としている。汪朝光「日中歴史共同研究報告」は、 権回収運動と日本の満蒙権益擁護をこの時期の日中対立の主 半ばの華北分離工作に至る日中関係について論じ、 どを総括的に論じ、「日本が戦争の開始とその結果に対して 日中戦争発生の歴史的背景、国内的国際的環境などについ 主に外交史的な観点から第一次世界大戦以後、 総括報告の波多野澄雄「日中戦争の原因と背景について」は、 両国の外交活用、 両国の国家体制の構造と社会の空気な 一九三〇年代 中国の国

因と国際要因であり、それぞれのテーマについて日中各一人

国際関係・外交、経済関係、文化関係、

全面戦争化の国内要

クな論集である。 原因を日本と中国

とりあげられているテーマは、近代化比較、 (大陸) の研究者がたがいに検討したユニー めぐる日中間の相互理解を深めるために、

認識と未来に係る有識者対話」

本

書は笹川

平和財団が二〇一六年から実施してきた「歴史

事業の一環として、近代史を

日中戦争が起きた

日中戦争はなぜ起きたのか 波多野澄雄 近代化をめぐる共鳴と衝突 中村元哉編

A5判 366頁 央公論新社 「本体 2.800円 + 税]

国家建設、第二章 国際関係·外交-(経済については日本二人、中国一人) が議論を展開している。 本書の構成は、総括報告、第一章 九一〇年代以降の貿易、投資、企業活動、 国際要因の六章からなる 第五章 ——一九二〇年代、第三章 近代化比較 全面戦争化 ――日中両国の 第四章 国内 経 文 を遂げた」と見なして、「これを単に『近代化』の遅速と考える 中両国は、 責任を負わなければならない」との結論を下している 章の吉澤誠一郎「近代世界のなかの日本と清朝」は、「日 九世紀の世界情勢のなかで、それぞれ異なる適応

因 化関係 済関係-

第六章 全面戦争化

一九一〇年代以降、

提」とし、 たのに対し、 する工業化から国外市場に大きく依存する工業化」に転換し た日本の経済成長が日清・日露戦争以降、 の近代化と工業化モデルの比較研究」は、 こと」に反対している。 一九三五年以降は 中国の近代工業化は「農業労働生産性衰退を前 厳立賢「一九三〇年代中 国家が独占する官僚資本主義 農業成長を基礎とし 「国内市場を基礎と -期以 前 0 両国

が構築されたと論じている

応は、 済 本は中国にとって「最大の抑圧者となった」と論じてい H うえで、「二○世紀初頭から一九三一年の満洲事変に至るまで、 ン戦争後の中国をめぐる国際秩序と日中関係の変化を述べた 変前夜における国際秩序の変容と日中衝突の原因」は、 ントン条約諸国との関係を論じている。王緝思・孫桜「満洲事 0 シントン体制が日本と中国の外交に与えた影響、 という視角から、ウィルソンの「新外交」・パリ講和会議)両国 使節 九三五 第三章の久保亨「近代中国経済の変容と一九三〇年代」は、 中関係は徐々に衝突・対立へと進んで」いき、最終的 「の対応、 |章の中谷直司 | 東アジアの国際秩序の変動と日中 可 第一次世界大戦後の |の相違を検討 年の中国経済使節団と一九三七年の日本の対華経 そして国民党の革命外交と日本を含めたワシ その相違の要因が日本の華北侵 「旧秩序の破壊と温 存 国際連盟 <u>の</u> 一面性 アヘ ワ 0 対 H

> 済提 あり、 もとづいて対応した国際環境にあったと述べてい 係」は、一九三五年までの国際経済秩序の変遷と世界恐慌 悦「一九三五年までの国際経済秩序と日中間の経済・貿易関 挫折説 目されるようになった「高橋財政の破綻による市場志向 る だった「資本主義 則 略、 戦争を発動できた主な原因」は、 本の軍国主義勢力が およびこれらが日中の経済関係に及ぼした影響を分析 「視点から」は、 日中戦争の経済的要因をめぐる学説 総力戦体制下の資源志向型説」、一九八〇年代以降に |携の拡大はきわめて困難だったと見なしている。 および幣制改革と景気回復による中国の自信の深まりに 「日本が華北政策を抜本的に転換しない限り」、 」があるとし、 この諸学説に、 の構造的必然説」、 「国際的要因の抑制をほとんど受けずに 最後の説の意義を重視 戦前から戦後にかけて主 各国が自身の核心的 軍事的要因 してい 日本帝国史研 から説 木越義 日中 利益 閆慶 型 朔 0 汴 す

協力と敵対の するなかで破綻した過程を明らかにしている。 たな関係の構築を目的に一 満蒙権益の拡大と対米協調の枠組みのなかで日本と中国 第四章の熊本史雄「日中文化関係 満洲事変・華北分離工作・盧溝橋事変へと事態が進行 『契機』 中 九二三年に開始され 国人の眼から見た『東方文化事 -協力と離 た対支文化事 徐志民 反 は、 一の新 在

の期待から次第に「懐疑、 文化教育界、日本留学生の三者が日本の軍事侵略により当初 業』」は、 東方文化事業 (対支文化事業) に対して中国の政府、 失望、 抵抗そして反対へと転じて

いった」と述べている。

認する政策へとドラスティックにその立場を変えた」と論じ 府との長年にわたる友好関係を放棄し、 満洲事変から盧溝橋事件までの時期の連続性を重視している。 抗 の原因について」は、満洲事変から盧溝橋事件までを「局部 因になった」と見なしている。臧運祜 作用しにくくなったことが対中関係の悪化を阻止できない 戦争を可能にし、日本側では政府内の統合を実現する機能 玉 戦争化の原因」は、 トナーとして」日本に目を向け、その結果、「ドイツは国民政 イツとの関係を中心に」は、 イギリスとの同盟形成を断念し、 [の政策メカニズムの変化とそれが日中関係に与えた影響を 第五章の光田剛 第六章の田嶋信雄「満洲事変・日中戦争と国際関係 し、「中国側では蔣介石へのリーダーシップの集中が対日 の時期、盧溝橋事件以後を「全面抗戦」の時期に分け、 「両国の政策決定メカニズムの変化と全面 満洲事変前から日中戦争全面化に至る両 スペイン内戦を契機にヒトラーが 対ソ戦争遂行の新し 「日中戦争の全面勃発 日本の中国侵略を容 | 原 が

> イツの介入も東アジアの情勢を複雑にしたと述べている。 争勃発の要因を求め、 ワシントン体制の弱体化と崩壊に満洲事変および日中全面 ワシントン体制外部の大国、 戦

については一致している。しかし、 る侵略戦争であり、 本書を執筆した日中両国の研究者は、 中国にとっての抵抗戦争であるとの 両国の研究者の間には以 日中戦争が日本によ

下の点で見解の相違も見られる。

第一は、日中両国の近代化とその後の経済発展につい

・ての

向がある。「総括報告」の汪論文は、 見解の相違である。 中 ・国の側では、これについての両国の差異が強調され 第一章の厳論文と同じ論 る傾

ため国力で日本に大きな後れをとり、 理に立って、「中国は日本とほぼ同時に近代化を開始したもの の中でも常に受動的な地位に置かれた」と論じている。 その効果と結果はいずれも日本にはるかに及ばず、 日本との競争や力比べ その

と開 格」をもつに至っており、「その点を看過した『近代化』 示されている。 るいは二○世紀の中国経済の発展を肯定的に評価する見解が 放的だった中国 第一章の吉澤論文は、 は 九世紀初頭までに 両国の近代化を相対化する見解、 閉鎖的社会だった日本 「相当に異なる性

他方、

日本の側では、

ている。于鉄軍・李卓「日中全面戦争へ至った国際的要因」は、

経済主導の発展が見られた時期」であるとしている 展 保論文は、「一八九〇―一九一〇年代が対外経済関係主導の発 欲的な改革」を重視すべきことを主張している。 て創造的に危機に対応した」こと、 はあまり意味がない」こと、 |の時期||だったのに対し、「一九二〇—一九三〇年代は国内 開港の時代に「 辛亥革命前 両国ともきわめ の清 第三章の久 朝の

意

題でも評価の違いが見られる。 ともその過程に戦争を回避する可能性があったのかという問 第二に、日中全面戦争に至る道が必然的だったのか、 それ

べる。 侵略と被侵略の歴史」であり、 列強が支配する国際秩序の下では避けようがなかった」 論文は、 中 第三章の閆論文は、「近代以来、 [側では必然論を主張する見解が多い。 国家主権と植民権益をめぐる日中の衝突は、 国際連盟や九カ国 日中関係史の主軸は 第二章の王 [条約の類は と述 欧米 一孫

見解が見られる。「総括報告」の波多野論文は、 他方、 日本側では、 全面戦争に至る複雑な過程を重視する 両国関係をつ

とである。

その近い将来の刊行を期待する。

しじま・のりゆき

争の必然性」は明らかであると論じている

経過を考察したうえで、「

盧溝橋事変へと至る日

本の全

面戦 更の

文は、「一四年抗戦史」論の立場から満洲事変前後の歴 外交も「ごまかし」だったと断じている。また第五章の臧論

基本的に見せかけ」にすぎず、

第一次大戦後の日本の

協調

だったと見なしている。 外交秩序の解体」は大戦後の日本政府と外務省の「既定路 ウィルソンの「新外交」の理念の導入を「東アジアで決定的に 機能不全に陥り、 したのは日本外交のフレームワークの転換」であり、 いったと述べている。第二章の中谷論文は、 なぎとめたものとして日中双方に存在した「穏健勢力」 日本ではそれを支えていた政党政治が軍部の台頭 中国との「共存共栄」を築く条件が失わ 第三章の木越論文は、 第一次大戦後 経済の矛盾 勢力 気により n H 圏

ある。 応じた両国 する姿勢だ」(中村元哉「結び」)という編者の意図は充分に達 日中 を述べあうという形式で、本書が編纂されたことは が、 成されているといえよう。 戦後」の このように日中両国の研究者には見解の相違が見られ |両国 両国の研究者が一つの研究テーマについてそれぞれ 両国の研究者の見解の相違についても、 .の人々がその解釈の異同の中身を多角的に知ろうと 日中関係を総括する論文集が企画されているとのこ の執筆者に敬意を表したい。 編者の意欲的な試みとその求めに 本書の続 「重要なの 画 期的

ルクス主義的見解が近来、後退したことを明らかにしている。 本経済の後進性)から日本の中国侵略は不可避だったとするマ 日中戦争の起源をめぐる両国研究者の対話の試み

フェリス女学院大学名誉教授